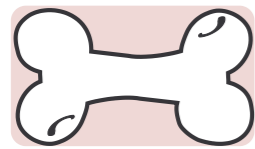


「動物と共に暮らす」!! 家族と動物のハッピー生活。 「健康診断」受けていますか?

～ 早期発見がカギとなる病気。その1:心臓病、その2:腎臓病 ～

獣医総合診療サポート
Intermedvet

佐藤 浩 先生



講演要旨

近年の獣医療の発展は目覚ましく、また動物達の健康管理に対するご家族の意識も年々高くなっています。その結果特殊な治療を除いては、動物達も人の医療と同様の健康維持プログラムや検査、治療が受けられるようになってきました。またここ数年、健康で元気な高齢の動物達が、定期健診を受ける姿を見る機会が増えているのも事実です。しかしこの様な時代であっても、動物達の健康を維持するために最も基本的で大切なことは、日々のご家族による健康観察と、動物病院で受ける定期的な健康診断であることに間違いありません。

動物達のちょっとした健康上の問題が、実は大きな病気のサインかもしれません。このサインは、ご家族にも解るものから獣医師でないと解らないものまで様々です。治療をして治る一過性の病気であればよいのですが、慢性疾患（心臓病や腎臓病など）の

場合は、診断された段階で残念ながら「完全に治る」ことはほとんどありません。また病状が進行してしまった場合は、治療効果が期待できないことも少なくありません。したがってこれらの病気はできるだけ早く発見（診断）し、治療を開始することが非常に重要となります。この早期発見・早期治療は病気の進行を緩やかにし、生活の質を維持することが目的となります。日々の健康観察や動物病院での健康診断の最大のメリットはまさしくこの部分にあると言えます。

「動物と共に暮らす」という概念は、両者が共に健康で気持ちよく、毎日を過ごすという前提で成り立つはず。ご家族と獣医師がお互い協力しながら動物達の健康を守り、自らの健康も意識しながら素敵な暮らしを築いていくことが、真の意味での「動物と共に暮らす」を実現する最大のポイントではない

早期発見がカギとなる病気

日々の健康観察と動物病院での健康診断

動物病院で受ける健康診断とは、動物達に大きなストレスを与えず費用面も考慮され、多くの動物達が受けられるという設定でなければなりません。高額で複雑な検査は通常、病気の疑いが深まってから行うのが正しい順序です。

健康診断では、先ず獣医師がご家族に対して色々な質問（問診）を投げかけます。この質問にご家族がどれだけ正確に答えられるかが、健康状態を把握するために非常に重要なポイントとなります。食欲や活動量、体重の変化、呼吸の様子、さらに水を飲む量や排尿量などとても大切な観察項目です。心臓病では咳が出て運動量が少なくなったりします。また腎臓病では尿の量や水を飲む量（飲水量）が増えることがあります。

獣医師による身体検査もとても重要で、問診で不明な部分やご家族では解らない小さな異常を発見できることがあります。例えば聴診器を使って心臓の音を聴くことで（聴診）、不整脈や心雑音などが発見されることがあります。またお腹を注意深く触ることで（触診）、腎臓の形や大きさの異常に気づくことがあります。一見健康に見えても、前者は心臓病を、後者は腎臓病を疑う所見です。

また健康診断は、ご家族による健康観察の成果を披露できる場であり、動物達が健康であるということをご家族と獣医師と一緒に確認できる機会にもなります。同時に健康観察や健康診断はこの行為を通して、ご家族-動物-動物病院という3者の間にふれあいや絆が自然と生まれるとても有意義な行為とも言えるのではないのでしょうか。

心臓病の話

小動物の心臓病は猫より犬で比較的好く見られ、特に中齢以降のキャバリア・キング・チャールズ・スパンエルやシーズー、マルチーズなどを代表とする小型犬種には、「僧帽弁閉鎖不全症」という心臓病が見られます。

心臓病と聞くと「命にかかわる激しい症状を伴う病気」という認識があるかもしれませんが、この心臓病（僧帽弁閉鎖不全症）は発症してから比較的ゆっくり進行します。初期の段階では心臓病としての症状が全く見られません。通常、健康診断で心雑音が発見され、最終的に心臓病と診断されるケースが多く見られます。この心臓病が診断された場合は明白な症状が見られなくても、治療

を必要とすることが意外と多いのです。人の医療では特定の心臓病であれば手術をして治すことが期待できますが、獣医療では多くの場合、薬や食事による治療が行われています。これらの治療は、心臓病を完全に治すものではなく、進行を遅くすること、そして症状が出ている場合はそれを緩和する目的で行われます。本講演ではこの心臓病の診断と治療に関して早期発見・早期治療が効果的であるという最近の研究報告も交えながらお話しさせていただきます。

腎臓病の話

腎臓病は大きく分けて急性腎臓病（急性腎不全）と慢性腎臓病がありますが、ここ数年我々獣医師の間でも話題になっているのは、慢性腎臓病の診断や治療に関するものです。この腎臓病は犬より猫で診断する機会が多く、この病気も発症してから緩やかに進行していきます。

初期段階の慢性腎臓病では、健康上何も問題がないように見えます。さらにこの時点では腎臓の機能を調べる一般的な血液検査でも異常が見られないことがほとんどです。

それでは「どうしたら早期発見ができるのか?」という疑問には「健康診断には必ず尿検査を持参して下さい」、そして「健康診断で必ず尿検査を受けて下さい」と声を大にしてお伝えするしかありません。明白な症状も見られず血液検査での異常もない初期の腎臓病では、唯一尿に異常が出ていることがほとんどです。例えば尿が薄くなっている（尿比重の低下）、あるいは尿にタンパク質が混ざると（蛋白尿）などが異常所見です。この場合、「ここ最近、いつもよりたくさん尿をしてたくさん水を飲んでいる（多飲多尿）」という症状がご家族により確認できることがあります。一方、獣医師による身体検査では腎臓の形や大きさの異常が分かることがあります。これらの所見が見られた場合我々は腎臓病を強く疑い、慎重に検査を進め正しく診断していくこととなります。

現在の獣医療での腎臓病に対する治療は、専ら薬や食事療法により行われます。治療の目的は心臓病同様に病気の進行を遅らせることにあります。進行してしまった場合は症状に合わせていくつかの治療を組み合わせますが、獣医療では透析が一般的な治療になっていないこともあり、腎臓病も心臓病同様に、早期発見・早期治療が非常に重要になります。本講演では数値やグラフを使いながら診断から治療までのお話をさせていただきます。

「人と動物が共生できる街、京都」、という大きな目標に向かって、動物と暮らすご家族と獣医師が共に真剣に考え、行動を起こすことでよりよい関係や環境を築けるのであれば、獣医師としての仕事を通して社会貢献ができるよう、ご家族共に日々前を向いて歩いて行こうと思う今日この頃です。